

『孤高の救い主・2』

’21/10/03

聖書箇所: マルコの福音書 14 章 43-52 節 (新約 p.98-)

皆さんは、どんな時に、“人間の本性”が分かると思います？…例えば、その人がすべてを失った時でしょうか？あるいは、いのちの危機にさらされた時…、あるいは、大きなターニングポイントを迎えた時などでしょうか？…こんなことが実際にあったかどうか知りませんが、よく笑い話などで聞きますのは、普段、自分のことを可愛がって…、甘い言葉をささやいてくれていた彼氏が、火事の時に、自分のことを見捨てて、「われさきに逃げて行ってしまった…」みたいなことです(苦笑)。

ここしばらく、私たちが学んでおりますのは、実に、そういったような状況に近かったはずであります。この時、イエス様は、もう間もなく、あの十字架にかかれるということで、大変なターニングポイントを迎えておりました。…もう間もなく、イエス様は逮捕され…、不当な裁判にかけられて…、その後、あの忌まわしい十字架上で磔にされます。果たして、そのような時、イエス様の弟子たちは、どのような行動を取ったのでしょうか？…あの 12 人の弟子たちは、イエス様から直接任命されて…、イエス様と3年以上の間、寝食を共にしてきて…、イエス様のなさる…、たくさんの奇蹟や癒しを目撃して、イエス様の語ってくださるみことばを誰よりも多く聞いてきた、あの 12 人の弟子たちは、どのような行動を取ったでしょう？

命題: 十字架を目前にして、イエス様はどのように孤独であったでしょう？

今日、私たちは先週に続いて、あの十字架という大変な御業を目前にして、イエス様が、どのような境遇に置かれていたか？…できれば、その時のイエス様の“心情”と言うべきものに、可能な限り、焦点を当てて、聖書のみことばを観察していきたいと思えます。そうすることで、私たち人間という生き物が、如何に愚かで、如何に弱く頼りないか…、如何に罪深い存在であるかということ、今一度、確認していきたいと思えます。

そうすることで、イエス様がこの地上に来てくださったことの必要性や、イエス様が完成してくださった救いの道に対する感謝の思いが、より一層明確になっていくものと信じます。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今回のみことばである、マルコ 14:26 以降をお開きくださいますでしょうか？

I・ペテロたちの 過信 ! (26-31 節)

どうか、まずは、先週に学んだ内容を、無茶苦茶簡単に復習させてください。今日のみことばの直前…、マルコ 14:26-31 のみことばが教えてくれていた内容は、弟子たち…、特に、シモン・ペテロの“過信”でありました。彼は、真唯一の神であり、また、救い主でもあられるイエス様の預言を否定して、こう言うわけです、「いいえ！ イエス様！ 例え、私以外の全部の者が躓いたとしても、私“だけ”は決して躓きません！ 例え、この命が奪われようと、あなたを否定したりはいたしません！」って…。しかし、そういった舌の根が乾かない内に、ペテロはイエス様のことを否定してしまうわけです。…そうでしょ！

しかし、そのような問題や弱さは、ペテロだけのものではありません…。私も…、また、皆さんも、同じような弱さを持ってしまっていて、私たちも、「もう2度と、こんな過ちは犯したくない！ もう、絶対に、神様を悲しませたくない！」と思っても、またすぐに、同じような罪や過ちを犯してしまう、罪深い生き物なのです。

そういったことを忘れてしまうと、私たちは、すぐに、罪の誘惑や悪魔の仕掛けた罠に引っかかってしまいます。…だから、私たちは、いつもいつも、心の中にある信仰の目をつむることなく…、救い主なる神様のことを見上げて…、その神様との交わりを持ち続けるよう、意識していけないといけません…。

II・ゲツセマネでの 顛末 ! (32-42 節)

だから、イエス様は、あの「最後の晩餐」の後、弟子たちを連れて、オリーブ山からゲツセマネの園へと下っていかれたのです。…と言いますのは、弟子たちに“祈り”が必要であったからです。…と同時に、あのイエス様もまた、父なる神様との交わりを1番に優先されたのです。

先週、私たちが学んだ、マルコ 14:32-42 のみことばが教えてくれていた、あのゲツセマネでの“顛末”を皆さんもご存知だと思います。イエス様に対して、「私は決して躓きません！」と豪語した弟子たちが、その数時間後には、たった1時間も祈り続けることができず、みじめな姿をさらしてしまいました…。だから、イエス様は、こうおっしゃられたのです、『誘惑に陥らないように、目をさまして、祈り続けなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。』(マルコ 14:38)って…。確かに、イエス様がおっしゃられたように、この時の弟子たちの心は燃えていたのかも知れませんが…。しかし、今日のみことばは、この後、たった数時間ほどして…、その弟子たちの心さえも打ち砕かれて、粉々になってしまった様を見ることができるわけです…。

III・イスカリオテの 裏切り ! (43-46 節)

どうぞ、皆さん、今日のみことばの内、43-46 節に注目してください。このみことばは、あのイスカリオテが、イエス様のことを“裏切った！”ということを教えてくれています。マルコ 14:43-46 には、このように記されてあります。

43 そしてすぐ、イエスがまだ話しておられるうちに、十二弟子のひとりのユダが現れた。剣や棒を手にした群衆もいっしょであった。群衆はみな、祭司長、律法学者、長老たちから差し向けられたものであった。

44 イエスを裏切る者は、彼らと前もって次のような合図を決めておいた。「私が口づけをするのが、その人だ。その人をつかまえて、しっかりと引いて行くのだ。」

45 それで、彼はやって来るとすぐに、イエスに近寄って、「先生」と言って、口づけした。

46 すると人々は、イエスに手をかけて捕らえた。

●裏切りの 手段 !

このみことばでは、イエス様のことを裏切ったイスカリオテが、大勢の者たちを引き連れて、イエス様のところへやって来たということを教えてくれています。並行記事であるヨハネ伝には、そこに、複数のローマ兵たちや祭司長たちから送られた役人たちが、一緒に同行していたということを教えてくれています。

改めて言うまでもなく…、イエス様という方は、極悪人ではありません。また、何らかの犯罪が証明されたわけでもありません。…なのに、イエス様を捕らえるために、複数のローマ兵まで同行していたというのは、普通では考えられません。…恐らく、祭司長たちは、短期間の間にも関わらず、かなり用意周到に準備をして、イエス様のことを捕まえて、裁判へ引きずり出すつもりであったようです。

さて、今日、このみことばで、私たちが1番に注目したいことは、イスカリオテがイエス様のことを裏切るに当たって…、彼が使った、その“手段”です。先程読んだ、44-45 節には、こうありました、『44 イエスを裏切る者は、彼らと前もって次のような合図を決めておいた。「私が口づけをするのが、その人だ。その人をつかまえて、しっかりと引いて行くのだ。」 45 それで、彼はやって来るとすぐに、イエスに近寄って、「先生」と言って、口づけした。』って…。何と、イスカリオテが、イエス様を裏切ろうとして、その合図に使ったのは「口づけ」であったのです。

「男性同士の口づけ」と聞きますと、今の日本に生きる私たちからすると、変に思ってしまうかも知れませんが、この当時のユダヤにおいては、ごく普通の親しい間柄で行なわれる挨拶の習慣でありました。…

実は、今でも、中東エリアやロシア…、あるいは、フランスなどでは、男性同士でも…、あるいは、女性同士でも、口づけやそれに近い挨拶がなされているのだそうです。彼らの文化では、身内や親しい友人、あるいは、尊敬する王様などに対して、その愛や敬意を表わす行為として、口づけをしたのだそうです。

どうぞ、皆さん。この“口づけ”という文化・習慣もそうですけれども…、聖書に書かれてある、たくさんの記事や出来事などを、今の私たちの感覚で理解しようとしなくてください。…実は時々、私が見る「〇〇警察 24 時」という番組などでも説明されてありますが、ある意味、警察が最も緊張するのが、犯人を確保する瞬間だそうです。…と言いますのも、彼ら犯人たちからすれば、“最後の悪あがき”と言うか、そこで捕まってしまうか、あるいは、何とか、警察の目をかいくぐって逃げ切るかで、彼らからすれば大きな違いが生じるからです。…だから、彼らは最後、それこそ、必死になって抵抗をするわけです。

しかし、その反面、逮捕する側からすると、その犯人を逮捕する瞬間は、大勢の警官に協力してもらっているわけだから、その日その瞬間に、本当に、犯人がそこに居るかどうかもまず、しっかりと確認しないといけないわけです。…それだけじゃありません。その犯人を逮捕する前に、逃亡や自殺をされても困るし…、あるいは、近くに居る人たちに何らかの危害が及んでもいけない。…何度も言うように、犯人の側は必死になって抵抗しようとする可能性があるのです。

今、私が何を言いたいのか？…この時、祭司長たちは、弟子のイスカリオテの協力を得ることができたので…、何とかして、このチャンスを逃すことなく、イエス様のことを捕らえたいわけです。決して、逃してはなりません！しかし、時は真夜中…、今のように、明るい街灯も無ければ、懐中電灯もありません…。まして、イエス様の周りには、少なくとも、11 人の弟子たち…、あるいは、もっと多くの群衆たちが居たかも知れません。彼らは、イエス様の逮捕？（確保）に抵抗するだろうし、誰かがイエス様の身代わりになって、その間に、イエス様が逃げてしまうかも知れません。…実際、この時のイエス様は、イスカリオテが自分をもう間もなく裏切ることを知っておられたし…、当のイスカリオテもまた、イエス様が自分の裏切りを知っていることを分かっていたわけです…。

だから、この時、祭司長たちから差し向けられた群衆たちは、決して、イエス様のことを逃すまいと、恐らくは、当時、かなり広かったゲツセマネの園を“包囲”したのではないのでしょうか？…そうして、そこに、イスカリオテを遣わして…、暗い中、ゲツセマネの園という“一種の雑木林”のようなところに居る、10 人以上の中から、できるだけ速やかに、イエス様を見つけて、そのイエス様が闇に隠れて逃げないよう、イエス様の身柄を押さえる必要があったわけです。

さて…、そのイスカリオテが、ゲツセマネの園にいるイエス様を見つけて、そのイエス様のことを逃すまいと、群衆たちに合図を送ります。…それが「口づけ」であります。…どうぞ、皆さん。もう1度、ここ 45 節の最後に記されてある『口づけした…』というみことばに注目してみてください。

実は、ここで『口づけした…』と訳されてあるギリシア語の言葉(καταφιλεῶν)は、「カタフィレオー」という動詞で、これは、「カタ」という「その後」に続く意味を強調するための前置詞と「口づけする」という動詞とが合わさって、構成されている動詞です。…つまり、この動詞は「単なる口づけ」を表わしているのではなく、もっと強烈と言うか、「熱心な口づけ」を指しているわけです。…ということは、この時、イスカリオテは、単なる形式的な口づけをしたのではなく…、熱心な口づけを、イエス様にしたわけなのです。

しかし…、もちろん、イスカリオテの側に、イエス様に対する特別深い愛情や、まるで、神様に対して抱くような尊敬があったわけではありません。…皆さん、気付いてくださいました？…ここ 45 節でも、イスカリオテは、イエス様に対して、『先生』と言って、口づけした…』と今日のみことばは教えるわけです。…

少し前の礼拝でも学んだように、この時、弟子たちは皆、イエス様のことを呼ぶ時、神様に対しても使うような、『主よ』という言葉(κύριος)…、ギリシア語の「キュリオス」という言葉を使って呼んでいました。…しかし、この時も、イスカリオテは、その『主よ』という言葉を使わないで、イエス様に対して、『先生』という言葉(πάββι)…、ユダヤ教の教師「ラビ」を指すような言葉を使っているのです。

つまり、イスカリオテには、イエス様に対する信仰や何か深い愛情というようなものは無かったのです！…まあ、だから、イエス様のことを幾らかの銀貨で売ることができたのだと思いますけれども…、しかし、そのようなイスカリオテが、この時、イエス様に対して、何か特別な…、熱心な口づけを交わしたわけで、それが、非常に“チクハグ”であったわけです…。

そんなイスカリオテに対して、イエス様は、どのように接しられたでしょう？…マタイ 26:50 には、こう記されています。『イエスは彼に、『友よ。何のために来たのですか』と言われた。そのとき、群衆が来て、イエスに手をかけて捕らえた。』…⇒皆さん、聞いてくださいました？…何と、イエス様は、自分のことを裏切り、幾らかの銀貨で売ろうとしていたイスカリオテに向かって、『友よ！』と呼んでくださったのです！…つまり、私が思いますのは、イエス様は、最後の最後まで、イスカリオテのことを冷たく扱ったり、無視されるのではなく、大切に扱い…、イスカリオテに愛を実践されたのです。

しかし…、これまた、今日のみことばには記されてありませんが、ルカ 22 章で、イエス様はイスカリオテに対して、『ユダ。口づけで、人の子(＝わたし)を裏切ろうとするのか？』(ルカ 22:48)とおっしゃっておられるのは、こういった背景と言うか、事情があったわけなのです。「本当ならば、特別に親しい間柄で交わすような口づけを、わたしに対してしながら、それでも、わたしを裏切るのか？」…そういったような感じですよ。

でも、実は、ヨハネ 13:18 で、イエス様は、そのイスカリオテのことを指して、こんな風な預言をしておられます。『わたしは、あなたがた全部の者について言っているのではありません。わたしは、わたしが選んだ者を知っています。しかし聖書に『わたしのパンを食べている者が、わたしに向かってかかとを上げた』と書いてあることは成就するのです。』…。実は、イエス様がここで引用しておられるのは、詩篇 41:9 のみことばであります。…ここで言われている、『わたしのパンを食べている者が…』というのは、「親しい友人」のことを表わしています。このように、イエス様は自分の弟子であったイスカリオテが裏切ることを、もちろんご存知であったし…、実は、旧約聖書に、そういったことが、もう既に預言されてあったのです。

●イスカリオテと 同行 していた者たちとは？

さて、その次に、そのイスカリオテと“同行”していた者たちについて観察していきましょう。…そこに居たのは、イスカリオテだけでなく…、『剣や棒を手にした群衆』たちでありました。このみことばによると、彼らは『祭司長、律法学者、長老たちから差し向けられたものであった…』と証言してくれています。それと、先程言ったように、そこには、複数のローマ兵たちと祭司長たちから送られた役人たち、また、大祭司のしもべたちもおりました。

果たして、このみことばは、そういった事実を伝えると共に、どういったことを私たちに伝えようとしているのでしょうか？…恐らく、それは、「群衆たちの変化」です。…だって、思いませんか？…つい4日ほど前の日曜日には、大勢の者たちが、イエス様のエルサレム入城を歓迎して、「ホサナ！ホサナ！」(「今、救ってください！」という意)と言って、大喜びで迎えたわけです。…そうでしょ？

もちろん、その時の群衆と、この時にイエス様を捕らえようとした群衆たちとが同一人物かどうかは分かりません。しかし、この聖書のみことばを通して伝わってくることは、やはり、私たち人間の弱さや変わり身の早さではないでしょうか？…と言いますのも、この後、マルコ伝 15 章で見えていきますように、祭司長たちは、イエス様が裁判にかけられた時も、民衆たちを扇動して、「イエス様ではなくて、バラバを釈放してほしい！」ということをおぼせさせたということが記されています。

今、私は何を言いたいのか？…この時に限らず、大勢の群衆たちは、移ろいやすい傾向があります。…というのも、彼らには、確固とした信念と言うか、揺るがない信仰が無いからです。…確かに、この時点では、まだ、11 人の弟子たちの信仰も、確固としたものとは言えなかったかも知れません。しかし、弟子たちの変化を皆さんはご存知だと思います。

今日、このメッセージを聞いてくださっている皆さんはいかがでしょう？…あなたには、確固とした信念や揺るがない…何か基準のようなものをお持ちでしょうか？…イエス様は、ヨハネ伝 8 章で、こう言われました。『わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。』(ヨハネ 8:12) って…。確かに、私を始め、生まれながらの人間は皆、確固とした信念や基準と言い得るものはありません。…でも、あなたは、本当に、そのままが良いのでしょうか？

ひょっとしたら、明日明後日、あなたは今、心の支えに何かを失くしてしまうかも知れません。…ひょっとしたら、あなたは、もうすぐ、大変な病気になって、余命宣告されてしまうかも知れません。…そんな時、あなたは、「ああ、私の人生に後悔はない！私は、このまま、いつ自分の人生を終えても悔いは無い！」と言い得るでしょうか？…果たして、今、あなたが精力を注いでいるお仕事や趣味は、あなたに、「自分が生まれてきたのは、このためだ！」と言い得るようなものなのでしょうか？…この聖書のみことばは、「決して変わらない御方がいる！あなたを造られた真の造り主なる神様がおられる！…どんなに世の中が変わっても、決して、変わらない真理がある！」ということを教えてください。どうか、あなたにも、真の神様を信じて…、決して、変わることはない基準や信念を持っていただきたいと願います。

IV・弟子たちの **逃亡** ! (47-52 節)

どうぞ、今度は、今日のみことばの内、47-52 節の部分に注目していきましょう…。このみことばは、**イエス様の弟子たちが“逃亡”してしまっ**た！ということをお教えてください。そこには、このように記されています。

- 47 そのとき、イエスのそばに立っていたひとりが、剣を抜いて大祭司のしもべに撃ちかかり、その耳を切り落とした。
- 48 イエスは彼らに向かって言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしを捕らえに来たのですか。」
- 49 わたしは毎日、宮であなたがたといっしょにいて、教えていたのに、あなたがたは、わたしを捕らえなかったのです。しかし、こうなったのは聖書のことばが実現するためです。」
- 50 すると、みながイエスを見捨てて、逃げてしまった。
- 51 ある青年が、素はだに亜麻布を一枚まとったままで、イエスについて行ったところ、人々は彼を捕らえようとした。
- 52 すると、彼は亜麻布を脱ぎ捨てて、はだかで逃げた。

●ペテロが取った、「肉 的な行動」!

ここ 47 節には、「弟子たちの内 1 人が、剣を抜いて、大祭司のしもべに撃ちかかって、その耳を切り落とした」ということが記されています。しかし、弟子たちの内の一体誰が、大祭司のしもべに撃ってかかったのか？ 共観福音書と呼ばれているマタイ伝、マルコ伝、ルカ伝には、その名前が記されていません。しかし、どういうわけか、ヨハネ伝だけは、それがペテロであったことを記してくれています。…その理由は、何だと思われます？

⇒実は、共観福音書が書き記された時代、まだ、ペテロは存命中で、もしも、彼が、大祭司のしもべに大ケガを負わせたとすると、ひょっとしたら、何らかの形で、ペテロに迷惑がかかるかも知れませんでした。しかし、ヨハネ伝が書かれた紀元 90 年以降には、もう、ペテロは殉教して、亡くなっておりまして。…だから、ヨハネは、もうペテロの名前を記しても、誰にも迷惑をかけないであろうと考えたと思われる。

さて、この時、まだ、ペテロには、大祭司のしもべに撃ってかかるという“大胆さ”がありました。…しかし、この時のペテロが取った行動は、決して、喜ばしいものではなく…、もちろん、神様のみこころでもありませんでした。だから、イエス様は、**マタイ 26 章に記されてるように、『剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。』**(マタイ 26:52)と教えてくださいました。…恐らく、この時にペテロがしようとしたことは、信仰ではなく…、自分自身の力で、イエス様のことを守ろうとしたのではないのでしょうか？…そういう意味において、この時にペテロが取った行動は、「肉 的な行動」であったと言い得るように思います。

でも、それに対して、イエス様は、こうペテロに教え諭されました。先程、紹介したみことばの後に、こう続きます。『53 それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとも思うのですか。54 だが、そのようなことをすれば、こうならなければならないと書いてある聖書が、どうして実現されましょう。』(マタイ 26:53-54) って…。

⇒皆さん、ここでイエス様がおっしゃられた内容を分かってくださいませよね？…イエス様は、「もしも、必要であれば、いくらでも、応援の御使いを呼んで対抗できる！」ということをおっしゃられたのです。しかし、もしも、そういうことをすれば、救い主として、この地上へ下ってきてくださったイエス様が、私や皆さんが犯した罪の身代わりとして、裁かれて、救いの道を備えることができなくなってしまいます…。だから、イエス様は、どうしても、そうするわけにはいかなかったのです！

先週、私たちが学んだみことば…、ヨハネ 10:18、『**だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。**』と、イエス様が教えてくれているように、このイエス様は、私や…、また、あなたが救われるための道を備えるために、自ら進んで、あの十字架へ向かっていってくださったのです！

どうぞ、今日のみことばの **49 節**をご覧ください。…ここでも、イエス様は、『…しかし、こうなったのは聖書のことばが実現するためです。』とおっしゃっておられます。先週学んだように、イエス様にとっては、神様のお言葉…、言い換えますと、神様のみこころこそが、1 番の優先順位であったのです。

ここでイエス様がおっしゃっておられることは、イエス様が捕らえられるタイミングに関して、です。…と言いますのも、イエス様は、毎日のように、エルサレムの神殿に来て、民衆たちに神様のことを伝え…、そのことを祭司長たちも知っていたはずですが。…にも関わらず、彼ら祭司長たちは、イエス様のことを捕らえようとはしませんでした。…それもまた、神様のみこころでありました。…天の神様は、イエス様が捕らえられ…、イエス様が十字架に磔にされるための最高のタイミングを、遙か、何百年も前から決めておられたわけ…、何人たりとも、その神様の主権に逆らったことを行なうことはできないのです。

●イエス様のことを 見捨てて いった者たちとは？

さて、では次に、そんなイエス様のことを“見捨てて”いった者たちのことを見ていきましょう。…この数時間前、イエス様の弟子たちは皆、「例え、全部の者が躓いたとしても、イエス様！ 私だけは決して躓きません！」と言い切っていた、あの弟子たちが全員！…全員、イエス様のことを見捨てて、逃げていってしまったのです！…果たして、この時のイエス様のお気持ちは、どういったようなものであったでしょう？

「それ！見たことか！」というような…、自分の予告通りになったことを、ほんの少しでも喜ばれたでしょうか？⇒いえ、私は、そうは思いません。…だって、イエス様は、この少し前、あのゲツセマネの園で、弟子たちのことを呼ばれ、一緒に祈ってくれることを願われたわけでしょう？…しかも、そこで、イエス様は、『深く恐れもだえ始められた…』わけでしょう？…イエス様は、かつて経験されたことが無いような思いをされたのです。…そうして、イエス様は、迫りくる十字架の御業のために、わたしは『悲しみのあまり死ぬほど』だ！とおっしゃられたのです。…皆さんは、死んでしまうほどの悲しみを経験されたことってありますか？

でも、ローマ書 12:15-16 のみことばは、こう教えます。『15 喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。16 互いにつつ心になり、高ぶった思いを持たず、かえって身分の低い者に順応しなさい。自分こそ知者だなどと思っははいけません。』って…。恐らく、イエス様と言うか、天の神様のみこころは、この時、弟子たちが、イエス様の迫りくる「十字架での受難」というものを知っていたわけですから、その弟子たちが、イエス様の思いに共感して、イエス様と心をつにして祈りを捧げることを、神様は望んでおられたのではないのでしょうか？

しかし…、実際の弟子たちは皆、そういったイエス様の苦しみに思いを馳せることができず…、何と、彼らは皆、居眠りをしてしまっていました。…3年も、イエス様と共に居て、その結果がこれです。…何と、イエス様は孤独であったでしょう？…もしも、イエス様が、私たちと同じような考えをお持ちであられたら、きっと、こうおっしゃるのではないのでしょうか？…「もう、やっつけられるか！」って…。そうじゃありません？…でも、イエス様は、最後の最後まで、短気を起こしたり、失望されることなく、あの十字架へ向かっていくくださったのです。

どうぞ、最後に、今日のみことばの 51-52 節をご覧ください。そこには、こんなエピソードが載っております。『51 ある青年が、素はだに垂麻布を一枚まとったままで、イエスについて行ったところ、人々は彼を捕らえようとした。52 すると、彼は垂麻布を脱ぎ捨てて、はだかだけで逃げた。』って…。実は、このようなエピソードは、マルコ伝以外の、3つの福音書には一切記されてありません。…ということは、つまり、他の3人の著者たち(マタイ、ルカ、ヨハネ)も、このようなエピソードには、あまり興味が無かったのです。しかし、どういったわけか、マルコだけは、この記事に特別な関心と言うか、よほどの思いがあって、このエピソードを書き記したわけですね。

そこで、多くの聖書研究者たちは、恐らく、この裸で逃げていった青年というのは、著者であるマルコ自身のことではないかと考えています。実は、この福音書を書いたマルコは、別名ヨハネという名前も持っています。彼のことは、聖書のあちこちに記されてあります。例えば、使徒 12:12 では、こう記されてあります。『12 こうとわかったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家へ行った。そこには大ぜいの人が集まって、祈っていた。』って…。

実は、このマルコの家は、エルサレムにありまして、初代教会の時代には、エルサレムの教会として使われておりました。そこには、女中も居て、聖書の記述を見ると、当時としては、かなり、大きな家であったことが分かります。実は、イエス様と弟子たちが、「最後の晩餐」を持ったという、あの2階の部屋も、また、イエス様の知り合いであったのではないかと…という話をしましたが、それらを総合的に考えると、イエス様たちが最後の晩餐を持った、あの家も、実は、そのマルコの家であったのではないかと考えられています。…今も、エルサレムへ行きますと、「恐らくは、この部屋が、その最後の晩餐を持たれた部屋ではないか？」とされている場所があります。この写真が、そうです。

ま、そのように考えますと、イエス様と 11 人の弟子たちしか居なかったはずのゲツセマネで、この青年が、そこに居たという理由もうなずけます。…彼は、最後の晩餐の後、こっそりと、イエス様とその一行の後をつけていったか、…あるいは、イスカリオテが大勢の者たちを引き連れて、最後の晩餐の部屋へ戻って来

た時、そこに居て、それから、急いで、イスカリオテたちの後をつけて…、そうして、この時、ゲツセマネまでやって来たのかも知れません。…しかし、そんな彼もまた、イエス様が捕らえられた時には、みっともない恰好で、逃げ出してしまったのです…。このように、当時、イエス様の周りに居た者たちは皆、一人残らず、イエス様のことを見捨てていってしまったことが分かります。

<励ましの言葉>

さて、前回にも学んだ通り、この当時、イエス様の周りには、12 人の弟子たちの他、大勢の民衆たち…、また、恐らくは、マルコという、当時はまだ、10 代の少年だったと思われそうですが、そんな者たちがおりました。いつも、イエス様の周りには、たくさんの取り巻きが居たのです。…だから、祭司長たちは、イエス様を捕らえるタイミングを探していたわけですね。…「まだ、今じゃない」って…。

しかし、肝心な時、つまり、あの十字架を目前に控えた時…、最後の晩餐ではイスカリオテがイエス様のことを裏切るために、そこを出て行ってしまっって…、ゲツセマネでは、残りの 11 人の弟子たちは皆、居眠りをしてしまう始末です。…そうして、その後、イスカリオテが大勢の群衆やローマ兵たちを連れてやって来た時には、弟子たちは皆、スタコラと逃げ出してしまっって始末です。

何度も言いますように、彼らは、ほんの数時間前には、「絶対に、私たちはイエス様のことを見捨てたりはいたしません！」と豪語していた者たちです。ペテロにしても、1度は、大祭司のしもべに切りかかりましたが、それも、一時的なものでした。…このように、神様に頼ろうとしない…、私たち人間の力や努力だけでは、決して、長続きはしません。…だから、私たちは、天の神様に祈りつつ、いつも、目を覚まして、神様から力を与えられ続けることが大事なのです。

イエス様を信じて救われたクリスチャンの皆さん。皆さんは、日々、この神様に頼って、この神様からの力を戴こうとしておられます？…もしも、そうでないなら、皆さんの信仰生活の歩みは、あの弟子たちのように、敗北に次ぐ敗北になってしまいます。…と言うのは、皆さんが神様の力によって、勝利するのではなく、自分自身の力で…、つまり、人間の力で、様々な誘惑に立ち向かってしまっているからです。

どうか、まずは、自分自身の弱さを認めて、神様の前にへりくだる者となってください。…そうでないと、私たち人間は、すぐに、自分たちの力や才能、あるいは、その他の何かに信頼してしまっって、決して、神様の御手にすがろうとしないからです。どうか、イエス様がそうされたように、自分自身に過信しないで、まずは、神様にすがり…、神様に対して熱心に祈る者となっていってください。

また、まだ、イエス様のことを信じておられない皆さん。…私たち人間は皆、罪深く…、本当に弱く頼りない存在です。私たちのことを、本当の意味で変えることができるのは、すべてを造られた真の神様…、全能なる神様しかおられません！…イエス様は、私や皆さんの弱さや醜さをすべてご存知の上で、あの十字架にかかって、本来ならば、私たちが受けるべき罪の罰を、身代わりに受けて、死んでくださっただけでなく…、約束通り、3日目によみがえってくださいました。どうか、このイエス様のことを、真唯一の神…、あなたの救い主として、信じ従う者となってください！そこにしか、すべての解決と罪からの救いはありません。…あなたが、1日も早く、このイエス様を信じる信仰をもって救われることを、私たちは祈っています。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。